カンボジア駆け足旅行

森田　進

少し古い話になるが、私は去年の三月十三日から一ヵ月間、大森実（『泥と炎のインドシナ』の著者）主催の太平洋大学に参加して東南アジア五ヵ国を見学した。

その中でも、旅全体を通して最初に訪れたカンボジアが、いちばん印象深く頭に焼きついている。今年に入ってからのカンボジアの政変とそれに続く動乱を見ていると、私の心はずきずきと痛む。ほんの四日間ではあったがシアヌーク時代のカンボジアを見聞したので、みなさんのカンボジア理解のなんらかの手助けになるかもしれないと思って、ペンを執った次第である。

一　カンボジアの位置・人口・戦後の歴史

カンボジアはインドシナ半島にある小国であり、東の南ベトナム、北のラオス、西のタイに囲まれている。面積は約十八万平方キロなので、日本の半分ほどである。人口は六二六万人で、小乗仏教が国教である。ベトナム・タイはそれぞれ三千万人の人口を擁している。なおカトリック信徒もわずかながらいる。

政体は、一九四七年五月に公布された立憲王国である。五三年十一月にフランスから独立し、六〇年四月以来、国王は空位で、同年六月にシアヌーク前国王が国家元首に就任したが、今年の政変でご承知の通り現在は北京で亡命生活をしている。彼はまだ四十代の精力的で聡明なプリンスである。

政治的立場はどうかといえば、少なくともシアヌーク時代は、言葉はおかしいが、厳正中立の仏教王国社会主義国家ということであった。

二　シアヌーク・ビル（現コンポンチャム）

私達日本人一行（三五〇名）が、シャム湾に臨むシアヌーク・ビルに着いたのは三月十九日の夕方であった。入港してみると、そこには工場の煙突ひとつ立っていない。ジャングルを背景にした突堤が二本、凪いだ入江に突き出ているだけである。ソ連船イリッチ号が接岸すると、現地人が百人ほど群がってきた。若者らが所在なげに空ろな目でぼんやりと私達を見ている。また痩せた母親が背中に二人の赤ん坊をくくりつけ、さらに右手と左手に一人ずつ子供を連れている。彼女は真剣な目差で、何かくれとせがんでいた。

三　カンボジア外交政策と仏教

三月二十日、バスで二百キロプノンペンまで飛ばすことになった。この国にはソ連製と中共製のバスしかない。私達は政府から準国賓として迎えられ、同日はカンボジア臨時国民祝祭日となった。独立以来こんなに大勢の日本人が入国したのは初めてなのである。

ところでシアヌーク殿下は、もし大宅壮一が同行するなら、太平洋大学の一行は入国させないと断言してきたそうである。大宅壮一氏は太平洋大学の名誉総長であるが、幸か不幸か過労でドクターストップがかかって参加していなかった。なぜシアヌークがそんなに怒ったかといえば、数年前大宅壮一氏の一行が、カンボジアを訪れ、帰国後、「シアヌークは国際乞食だ」と何かの本に書いたからだという。なぜシアヌークが国際乞食かといえば、カンボジアは独立したものの、経済力が極度に低く、自力でやっていけない。そこでシアヌーク・ビル港を築くために旧宗国フランスから援助を受け、港から首都プノンペンまでの二百キロに及ぶ道路は米国に寄付してもらい、首都からアンコール・ワットまでの観光道路（三百キロ）はソ連に寄付してもらい、ビール工場・紡績工場は中共製、首都のメコン河にかかる橋は、それぞれ米国、ソ連、フランス製、国営病院はソ連製、スポーツ施設は中共製という具合だからである。

いわゆる自由諸国とも共産諸国とも適当に国交を保ち、あらゆる援助を無償で受けることに関しては、シアヌークはらつ腕であったらしい。どちらかといえば、シアヌーク体制下の同国は左派的中立国だったといえよう。さて肝心の日本はといえば、首都の水道施設工事を請負ったぐらいで、ほとんど何も援助していない。むしろ絶好の市場として、自動車、カメラ、衣料品をぞくぞく売りこんでいる。シアヌークは、今度こそ日本の経済援助を有利に取り付けようと思って、臨時国民祝祭日まで設けて、私達一行を大歓迎してくれたのに違いなかった。残念ながら私達は同国滞在中に直接殿下にお目にかかってお礼を述べる機会をもてなかった。

ある新聞記者の分析によれば、カンボジアがあらゆる国から無償の援助を取り付けることと小乗仏教とは密接な関係がある。すなわち小乗仏教によると、富める者は貧しき者に対して施しをしなければならない。それが慈悲である。貧しき者は当然施しを受ける権利があり、施しを受けたからといってなんら束縛されないのだという。すなわちシアヌークは国際乞食ではなくて、小乗仏教的外交を演じているのにすぎないと。

四　首都プノンペンのようす

二十日の夕方、長い長いジャングルの国道を抜けて首都プノンペンに入った。町は整然と区画整理され、街路樹が美しく、中央道路のまん中はグリーン地帯で、色とりどりの花が咲き乱れていた。フランス植民地都市の典型なのである。

まずは中共製のスポーツ・シティの宿泊所に行き、メコン・レストランという国営の料理店で昼食になった。メニューは英語・フランス語・カンボジア語・中国語で書いてある。英語のしゃべれる人はめったにいなかった。

食事後、人民社会主義同盟常設業績展示館を見学した。シアヌークの息のかかっている王国青年団の熱狂的な歓迎を受け、教育省の官吏（ほとんど二〇代）の懇切ていねいな説

明を受けた。そこには、衣料品・農産物・軽工業用品・薬品・アルコール類・芸術品などが陳列されていた。けして豊富とはいえないが、カンボジアが今懸命に自力で自分たちの必需品を生産しているのだという気力は十分に窺われた。絵画や彫刻の中には、ベトコンが勇敢に戦っているようすを描いた作品がいくつか目に入った。新興国家の若々しさがこちらにびんびんと響いてくる。

夜の首都を歩いてみて驚いたのは、その静けさである。ネオンの海など全くお目にかかれない。それに外国人がまったく目につかない。しかも夜九時にはほとんどの店は閉まる。商店の九五%までは華僑の経営であり、残りわずかな店がベトナム人のものである。華僑の大部分は広東省あたりの出身であるが文化大革命以後、シアヌークが中共からの工作者を追放したので、毛沢東万才という看板は見当らなかった。商店といっても日本の地方都市の二流の店ぐらいの感じである。その他はラーメン屋の屋台よりももっと不潔で汚ない露店で、タバコもバラ売りしている。昼間たしかに見た美しい小パリはどこかへ消えてしまい、貧困だけが暑気の中でむんむん匂っていた。子供がやたらに多く「給我五円銅貨為汝記念」と書いた紙きれをもってきて、金をくれとせがむ。

往来では汚ないメシを売っている。一見乞食かと見まちがえそうである。しかし考えてみれば、交通ラッシュのあまりないこの町で大通りの歩道で地べたに腰をおろしてメシを食うなんて楽しいことではないか。

プノンペンの市場には独特の猥雑な雰囲気があり、あたかも上野のアメヤ横丁のようであり、浅草の観音前通りのようでもある。が、じつに暑いのと空気がきれいなこと、また広東語・フランス語・カンボジア語・英語などが入り乱れて花火のような楽しさがあることが違う点である。

プノンペンでは自動車よりも自転車と人力車を合わせたようなシクローという乗物のほうが多い。運転手のほとんどはカンボジア人で裸足であるし、ズボンとシャツ一枚だけである。今年の動乱でシクローが三分の一も減ったという。皆給料の多い政府軍兵士になったのだという。

五　農村・仏教寺院

首都からアンコール・ワットへつづく三百キロの道路は茫漠とした大平原地帯を貫いている。トンレ・サップ湖という琶琶湖の何倍もある湖があるが、あいにく乾期だったので干あがっていた。道路に沿って二〇キロ間隔ぐらいに集落がある。ネオンなどは一つもない。ニッパ・ハウスが二〇軒ぐらいぽっと並んでいる。村にはたいてい一軒か二軒雑貨店があり、きまって華僑である。

またいくつかの村には小学校がある。カンボジアの小学校はだいたい仏教寺院の経営と聞いていたが、事実か否か確かめられなかった。が、村には必ず立派な寺院がある。

元毎日新聞香港特派員であったジャーナリストから聞いた話であるが、カンボジア人は小乗仏教の篤い信徒なので、この現実に対してはほとんど希望を抱いていない。つまり厭離穢土なのである。したがってわずかでも現金が手に入ると、みな寺院に寄付してしまう。浄財を寄付して、ひたすら極楽浄土へ迎えられることのみを期待しているのだという。

ところで私達の一行の中に妙法院一乗という仏教系の新興宗教の僧侶がいた。彼の説明

によれば、もともと仏教の中に極楽思想はないのだという。同志社大のS教授（平等院の僧侶、S氏も私達と一緒であった）もその通りだと言っていた。とにかく現在の仏教は、原始仏教とは著しく違ったものであるらしい。

まあそれはそれとして、寄付された浄財を中心にして、僧侶はその村の福祉事業に使用するのだという。

ほんの四日間の滞在で断言できるはずはないのであるが、そう言われればこの国には村役場に該当する建物が見あたらない。寺院だけがコンクリート造りで立派である。私達が休憩したある村では、休憩場が寺院であった。そこにはカウンターがあり、ジュースやコーラをくばってくれたし、談話室があり、立派なトイレまで備わっていた。人ずてに聞いた通り、どうやら寺院がそっくりそのまま役場を兼ねているらしい。これをいちおう仏教社会主義というのであろうか。

カンボジア軍人とともに（アンコール・ワットにて）中央が筆者

またこれもあるジャーナリストから聞いた話であるが、カンボジアの農民は極度に現実を怨んでいるが、二つだけ贅沢品を欲している。一つは日本製カメラ、もう一つは何とラジオだという。かれらは一生に一度自分の姿を写真にとってみたいのだそうだ。かれらのカメラに対する好奇心はたしかにものすごいものがあった。ラジオが欲しい理由は、シアヌーク殿下のなまの声に接したいからだという。それから小乗仏教の読経を聞きたいからだという。そういえばプノンペンの町角で、ラジオの読経に恍惚として耳を傾けているシクローの運転手がいた。が夜になると彼はポンビキ屋に早変わりした。貧しいのである。

アンコール・ワットの帰路、火事を見た。漆黒の闇の中で、密林のそばのニッパ・ハウスが赤々と燃えていた。あたりは全くの平原地帯。消防車はもちろん来ない。私達のバスの行列は停まった。護衛にあたっていた警察官が二、三人駆け出して行った。しばらくして帰って来ると「誰も怪我人はいないから安心です」とだけ言った。別に水をかける気配もない。野次馬といえば私達だけである。それももの珍しそうにバスから首を出して眺めている。あたりは静かである。まるで野辺送りのようなもの哀しい光景であった。明日になれば、またすぐにニッパ・ハウスは再建されるとのことであった。

六　王城見学、兵士と音楽

王城と国会議事堂とは隣り合わせである。国会議員は二十八名しかいないそうである。

王城のほうも想像していたよりは小さかった。反米国家であるから（少なくとも去年まではそうであった）、米人の入城にはひどくうるさい。ガードはサンダルを穿いている。博物館はフランス風の様式であったが、儀式場・舞踏場・王の邸などは純然たるカンボジ

ア様式で、全体としてはまとまった配置にある。どの建物も（博物館は例外である）目がさめるような色彩をほどこしてあり、金や赤や緑や青の原色に輝いていて、あたかも童話の国のケーキのお城の中に迷いこんだようである。可愛らしいというのが偽りのない感じである。プカ（牛の爪という意）の樹が真紅な花を見せていた。

舞踏場ではロイヤル・ダンサーらが、老婦人の厳しいレッスンを受けている。その踊りは、一見動きが少ないが、よく見ていると、微妙な指のしぐさ、目の動き、袴のようなスカートを巻いた腰のゆるやかな動きと線など驚くべき洗練さに満たされている。ここにクメールの高度な文明のひとつが引き継がれていた。さらに興味深いことは、王城警備の兵士らが、身を柱に凭れさせて、踊りと音曲に合わせてかすかに首を縦に振り振り、うっとりと見惚れ、聞き惚れていることだ。

七　ベトナム戦争との関係

アンコール・ワットを見学したその夜のことであった。暗い乾き切った平原の彼方に時時ぱあっと閃光が走った。護衛の兵士の説明によれば、あれはベトナム戦争の砲火が空に映えるのだという。首都プノンペンにいても夜になると砲声が響いてくるのが聞えるという。

それにしても、カンボジアののどかなことよ。国境を接していながら、ほとんど戦争の脅威はなさそうに見える。が全くないのではない。インテリは、ベトナムのあとはカンボジアが危いと少なからず心配しているという。去年三月の時点において、カンボジアが米国と国交を断っていたのは、そもそも米軍のたびたびの越境事件に端を発しているし、米国のほうでは、社会主義圏の武器が、一つはホーチミン・ルートを通じて、一つは海路シアヌーク・ビルを通じて入ってきているとの見解に立っている。それがどこまで事実であるかは私には分からないが、可能性がけしてないとはいえない。インドシナ三国において国境紛争は深刻である。だいたいベトナムとの国境の多くはジャングルなので、明確な国境線がないことが問題を困難にしている。

メコン河岸の公園に米機の残骸が晒されていた。越境してきたのを勇敢なカンボジア軍が射ち落としたのだという。

プノンペンには、民族解放戦線の代表部が置かれており、私達一行のうち、十人の学生と大森氏と教団のK牧師とが会見を申し込んだ。そしていろいろと意見を交換し合ったのち、「ベトナム人民戦線を徹底的に支持する」という声明文を出した。翌日新聞はこのことをかなり大きく報じた。

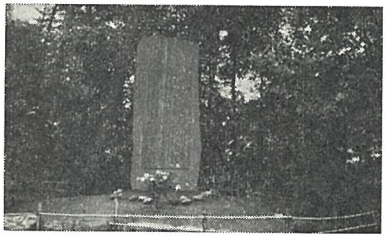
（付記・去年六月にカンボジアと米国は国交を回復し、米機の残骸は取り片ずけられた。今年の動乱で、北ベトナム大使館と臨時革命政府大使館は焼き打ちにされた）

★

私達はシアヌーク政府をはじめ、農民や町の人々に言葉に言い尽せないほどお世話になった。港で別れるとき、お互いに両手で抱き合いながら別れを惜しんだ。そして「ア・クン、ア・クン（ありがとう）」と合掌した。この国の素朴な人間感情がどんなに私を勇気づけてくれたことか。私の中に生まれてきた人間への信頼はその後ますます深くなるばかりである。どうか一日も早くカンボジアに平和が来るようにと祈らずにはいられない。

（昭和三十九年・文学部卒・四国学院大学専任講師）

宮沢賢治と高村光太郎



川並秀雄

宮澤賢治がはじめて高村光太郎のアトリエを訪問したのは、大正十四（一九二五）年九月、賢治が三十歳の時であった。

宮澤と高村が相並んで、それぞれの作品を発表したのは、この年の九月、草野心平が編輯していた「銅羅」第四号であった。宮澤は詩「心象スケッチ、負景二篇」として「命令」「未来圏からの影」を、四十三歳の高村はエミイル・エルハアレンの詩の訳を掲載している。

高村光太郎は、宮澤賢治詩碑のために賢治の「雨ニモ負ケズ……」のよく知られている詩の一部を次の如く書いて、送った。高村五十四歳の時である。

野原ノ林ノ蔭ノ小
サナ萱ブキノ小屋
ニキテ東ニ病気ノ
コドモアレバ行ッ
テ看病シテヤリ西
ニツカレタ母アレバ行ッテ稲ノ束ヲ負ヒ南
ニ死ニサウナ人アレバコワガラナクテモイ
イトイヒ北ニケンクワヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒヒデリノトキ
ハナミダヲナガシサムサノ夏ハオロオロア
ルキミンナニデクノバウトヨバレホメラレ
モセズ苦ニモサレズサウイフモノニワタシ
ハナリタイ

宮澤　賢治

この詩を選んだのは、高村光太郎、谷川徹三、草野心平、藤原嘉藤治等であった。

碑石は厚さ約一尺、高さ十一尺、幅四尺等の水成岩の粘盤岩、土台は方六尺のコンクリートを地中に埋めてそれに碑を建て、上部を草地として、さながら草地より碑がはえたようにした。

碑石は、無疵の自然の型を保った風体のいいのを選ぶため、花巻の石工今藤清六が産地の石巻市外稲井村で発見したものである。

場所は、賢治が晩年居住していた花巻の下根子桜、羅須地人協会跡、南面の樹木を伐採し、碑は南面し、遙かに北上山地やその河川を一望にあつめ得る最適の地である。

高村の書が十一月二日に到着し、石工今藤は懸命の努力を傾けて十一月十七日に刻み終え、昭和十二年十一月二十三日に除幕式を挙行した。

私は除幕式に招待を受けたが、当日都合が悪く参加できなかったので、昭和十七年八月十二日、盛岡賢治子供会が、詩碑の前で賢治祭を行なうというので列席した。

可愛らしい児童が、賢治の詩「くらかけ山の雪」を朗読するのを聞いたり、「セロ弾きの

ゴーシュ」の劇を見たりしているうちに、お昼になった。

野原で暖かい味噌汁とおいしい山菜料理をいただきながら、ふと詩碑を見あげてみた。するといつも読み馴れて暗誦している、あの有名な詩と、どうもちがうようにおもえた。写真にとって調べてみるとはたして原詩と違っていた。試みに脱字などを入れると次の如くなる。

野原ノ（松ノ）林ノ蔭ノ小サナ萱ブキノ小屋ニヰテ東ニ病気ノコドモアレバ行ッテ看病シテヤリ西ニツカレタ母アレバ行ッテ（ソノ）稲ノ束ヲ負ヒ南ニ死ニサウナ人アレバ（行ッテ）コワガラナクテモイイトイヒ北ニケンクワヤソショウガアレバツマラナイカラヤメロトイヒヒデリノトキハナミダヲナガシサムサノ夏（ナツ）ハオロオロアルキミンナニデクノバウ（ボー）トヨバレホメラレモセズ苦ニモサレズサウイフモノニワタシハナリタイ

私は折角、詩碑となって建てられているものを、今更、誤りがあると指摘するのもどうかとおもい、なやんでいた。しかし、あの有名な詩が誤り伝えられては……と、やっと決心して、昭和十八年七月十二日長文の手紙を高村光太郎に書いて送ったがすぐに東京から、次の返書を受取った。

「拝復　おてがみありがたく拝読いたしました。これまでそれについて質問をうけた事がないので、宮澤賢治詩碑々面の不審がそのままになっていました。貴下によって事情が明瞭になる事をよろこびます。

宮澤賢治さんのあの手帖は以前に草野心平君から示されて、その時「雨にもまけず」の鉛筆がきをよみ、感動いたしましたが、手帖はやがて国元へかえり、字句は忘れていました。

その後国元の令弟宮澤清六さんから碑詩揮毫の事をたのまれ、同時に清六さんが写し取った詩句の原稿をうけとりました。小生はその写しの詩句を躊躇なく、字配りもそのまま揮毫いたした次第であります。

さて後に拓本を見ると、あの詩の印刷されたものにある「松の」がぬけていたり、其他の相違を発見いたし、もう一度写しの原稿をみると、その原稿には小生のバウがボウであり、小生のサウがソウであった事を又発見しました。

つまり清六さんが書写の際書き違った上に、小生が又自分の平常の書きくせで、知らずにかな遣を書き違えていた事になります。甚だ疎漏であった事を知りましたが既に彫刻の出来てしまったあとの事でありましたため、そのままにいたしました。

碑面の不審は右のやうな当時の事情で起った次第、よろしく御解明なし置き下さらば、由来がはっきりして今後の研究者の無駄な考慮や疑問がはぶかれる事となりませう。その点をよろこびます。

貴下の細心な研究精神をまことにありがたき事と存じ、早速右御返事まで申上げました。

草々」

高村光太郎六十一歳の時である。

昭和二十年四月十三日、空襲により林町のアトリエ焼失。五月、岩手県花巻町に疎開。十月十七日、岩手県稗貫郡太田村山口の小屋に独居。自炊生活に入った、高村は賢治のふるさとに生活するにつれ、詩碑の誤りが気になり、昭和二十一年十一月三日、抜けた文字を横に追刻した。この詩碑はまさに高村光太郎と宮澤賢治との親しい交友を表現するものであろう。

（商学部嘱託講師）